

紀 要

第 22 号

2009.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

近江八幡市白王遺跡出土の縄文土器拓影

小島 孝 修

1. はじめに

白王遺跡は琵琶湖東岸の近江八幡市白王町に所在し、『平成13年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会2003）には、縄文時代の散布地として周知されている。遺跡の概要や出土遺物については、後述するようにこれまで複数の報告がなされている。しかし、本稿で紹介する縄文土器拓影図は、そのいずれにおいても報告されていないものである。良好な資料が多く含まれているため、ここに紹介し、今後の情報の共有化を図りたいと思う。

2. 白王遺跡とその調査の概要

白王遺跡は、近江八幡市・蒲生郡安土町・東近江市（旧能登川町）にまたがる旧大中の湖の南西岸に位置し、独立山塊の東山裾が湖底に没する箇所立地する。干拓に伴う揚水により、佐藤宗男氏により1967年に発見され、遺物が回収された。その位置する場所から、以前は「大中の湖西遺跡」と称されていた。（佐藤・酒井1977）によれば、遺構はなく、遺物包含層となる黒色粘土層が確認されている。この黒色粘土層は、表層の砂層の下位に堆積し、厚さ0.5～0.6mを測るもので、その下位は基盤層と考えられる灰色粘土層に到る。遺跡北側では縄文時代早期・前期の遺物を中心とし、南側では縄文時代後期の遺物を中心として分布する。干拓工事時の不時発見のため、正式な発掘調査はなされておらず、その後は佐藤氏により石器の報告がなされたのみである（佐藤1985）。



図1 白王遺跡位置図 (S=1:25,000)

その後、出土遺物のうちの残存状態の良好な一部の縄文土器などについては、米原市入江に所在する琵琶湖干拓資料館で保管・展示されている。それ以外の遺物の多くについては、国立（現独立行政法人）奈良文化財研究所を経て滋賀県教育委員会に寄贈され、現在は滋賀県埋蔵文化財センターで保管されている。これらの遺物は正式に報告されないままであったが、琵琶湖干拓資料館で保管する縄文土器については、滋賀県立近江風土記の丘資料館で開かれた企画展『近江の縄文時代』（1984）で展示されたり、『縄文土器大観 第4巻』（小林編1988）に縄文時代後期初頭の中津式土器の写真が掲載されたりするなどした。

その後、筆者は同僚の鈴木康二とともに滋賀県埋蔵文化財センター保管の縄文土器について報告し（鈴木・小島2002）、白王遺跡出土遺物の基本的な内容については、これによって公表されることとなった。筆者の担当した縄文時代中期以降の土器についていえば、中期末から後期初頭にかけての良好な資料群の様相の一端を明らかにすることができたと考えている。琵琶湖干拓資料館保管の縄文土器13点についても、内田和典氏により近年公表された（内田2006）。実測図の縮尺が1/6と小さいことや、遺物の検討が簡略であることなどがやや悔やまれるが、ともあれ公表されたことは今後の縄文土器研究にとって大きな意味を持つことになると考えている。

3. 今回の公表に至る経緯

今回公表する拓影図は、同僚であった松沢修から2004年に譲り受けたものであり、複数の遺跡の縄文土器拓影図とともに保存されていた。そのうちの高島市今津町弘川B遺跡の一部の縄文土器拓影図については、以前に本『紀要』第21号誌上にて公表したことがあり、その際に採拓された経緯についても触れた（小島2008A）。

白王遺跡のものとしていた拓本は、69点あり、そのほとんどは同じ拓影図で陰影の濃淡の異なる2枚があった。69点のうち6点はこれまでに公表されているものである。すなわち、（佐藤・酒井1977）の最下段右から2点目であり、（鈴木・小島2002）の78・94・96・98・114である。それ以外の63点について、今回拓影図を公表することとした。拓影図のみで断面実測図がないのは、現物の所在が確認できていないためである。

前述のように、白王遺跡の遺物は滋賀県埋蔵文化財センターと琵琶湖干拓資料館で保管されているが、今回拓影図を報告するこれらの縄文土器は、そのどちらにも含まれていない可能性が高いと考えられるものである。採集者の佐

藤宗男氏宅にそれらが保管されている可能性もあるが、それについては今回確認していない。また、今回報告する縄文土器には4cm角程度の破片も含まれているが、この程度の大きさの縄文土器については、筆者らの整理・報告の際に実測遺物として抽出しなかった可能性も高い。したがって、滋賀県埋蔵文化財センター保管資料中に含まれる可能性もあるが、それについても今回は確認していない。

4. 各資料の概要

拓影図のみのため、いずれも天地は筆者の推定である。外面に施す文様により、以下の4類に分けた。

A類：2条沈線の磨消縄文帯を施すもの（1～44）

本資料群の主体をなすものであり、さらに3細分した。ただし、文様構成についてはこの3細分での差異は基本的には認められないと考える。

A1類：通常の磨消縄文帯を施すもの（1～40）

沈線自身の幅が太く、2条沈線の間がある程度の幅を持つものである。中には、縄文施文が沈線に規定されないもの（17・40）や、沈線が途中で途切れるもの（19）、縄文が沈線をはみ出るもの（13）なども認められる。また、36～40は縄文が無節のものである。

1～8は波状口縁部と推定されるものである。1～6は波頂部下で磨消縄文帯が渦巻文（J字文）を構成するものと考えられ、1・4・5は波頂部から磨消縄文帯が垂下する。6はそれらとは異なる文様構成を示し、波頂部の左右に指頭押圧を施す。7・8は緩い波状口縁を示すと推定され、口縁端部に縄文を施す。

9以降は基本的には体部片と考えているが、水平口縁部となるものもあるかもしれない。部位が不明であるため詳しいことは言いようもないが、磨消縄文帯による様々な文様構成を確認することができる。

A2類：沈線内に刺突を施すもの（41～43）

41～43はいずれも同一個体の波状口縁部と考えられ、41は波頂部と考えられる。口縁を巡る縄文帯の上位の沈線内に、竹管状工具による円形刺突を連続して施し、43には体部の沈線にも一部刺突が確認できる。

A3類：沈線間に短沈線を施すもの（44）

44は波状口縁部と考えられる。口縁に沿って縄文帯が巡るが、縄文ではなくペン先状工具による短沈線を充填する。（佐藤・酒井1977）には同一個体と考えられる拓影図がある。

B類：沈線文のみを施すもの（45～48）

45・46は山形を呈する口縁部と考えられる。45は口縁波頂部に円形の突起を貼付し、その上面に沈線と刺突を渦巻状に施す。体部は口縁下の無文帯の下位に水平沈線を施す。46は口縁端部には平行する2条の押引沈線を口縁に沿って施し、外面には沈線により三角形を描く。47は幅狭の沈線により文様を描くが、モチーフなどは不明である。

C類：縄文を施すもの（49～59）

59は水平口縁部と考えられる。口縁下に幅約3cmの縄文帯を巡らせ、体部にも縄文帯を複数条縦走させる。49も同様の文様構成をとる水平口縁部と考えられ、横走する縄文と縦走する縄文が認められる。50も同様に口縁下に幅2cmの縄文帯を巡らせる。51は屈曲部かとも考えられる拓影の濃淡の差が認められ、縦走する縄文帯を施す。52～58は部位の判断は困難であるが、このうち52・53は口縁部かとも考えられ、縄文が羽状とも見える。

D類：条痕を施すもの（60～63）

60～62は水平口縁部、63は体部と考えられる。60は口縁に外側への折り返しが見られ、歯状工具による条痕を縦位あるいは斜位に不規則に施す。61～63は口縁部には水平に、体部には斜位に、条痕調整を施す。

5. 各資料の位置付けと採拓の意図

続いて、これらの縄文土器を、時期的・型式学的に位置付けることとしたい。大半を占めるA類（2条沈線の磨消縄文帯を施すもの）は、縄文時代後期初頭の所産としてほぼとらえられる。さらに、沈線自体の幅が3～4mm程度と比較的太いことや2条沈線間が2～4cmとある程度の幅を持つことなどから、そのほとんどは中津式の範疇でとらえられる。本資料中には全体の文様構成が判明するような残存状態の良好な資料がほとんどないため、それ以上の細分はひとまずここでは行わないでおきたい。B類（沈線文を施すもの）は、厳密に時期を比定しかねるものが多いが、45は押引沈線が認められることなどから、縄文時代中期末の所産と考えられる。C類（縄文を施すもの）は、口縁部の横走する縄文帯あるいは体部の縦走する縄文帯が認められるものは、縄文時代中期末～後期初頭の所産と考えられるが、羽状縄文とも考えられる52・53は、縄文時代前期前葉・中葉の北白川下層Ⅱ式となる可能性がある。D類（条痕を施すもの）も、縄文時代中期末～後期初頭の所産として考えてよいと思われるが、条痕調整を施すものは縄文時代早期末～前期初頭の東海系条痕文土器となる可能性も捨てきれない。

以上のように、大半のものは縄文時代中期末～後期初頭の所産としてとらえられ、一部に縄文時代早期末～前期中葉のものとなる可能性があると考えている。これらの位置づけは、すでに公表されている資料と比較しても、齟齬をきたすものではない。さらに、縄文時代中期中葉以前よりも同中期末以降の方が、残存状態が比較的良好であるという既公表資料における状況証拠からすれば、C類・D類の大破片のもの（59～62）も縄文時代中期末以降のものである可能性が高いと考えている。ただしこの点については、現物がないため、積極的に肯定する証拠を現在持ち合わせているわけではない。

さて、当初述べたように、白王遺跡から出土した縄文土器の所属時期は、採集された佐藤宗男氏の言葉を借りれ

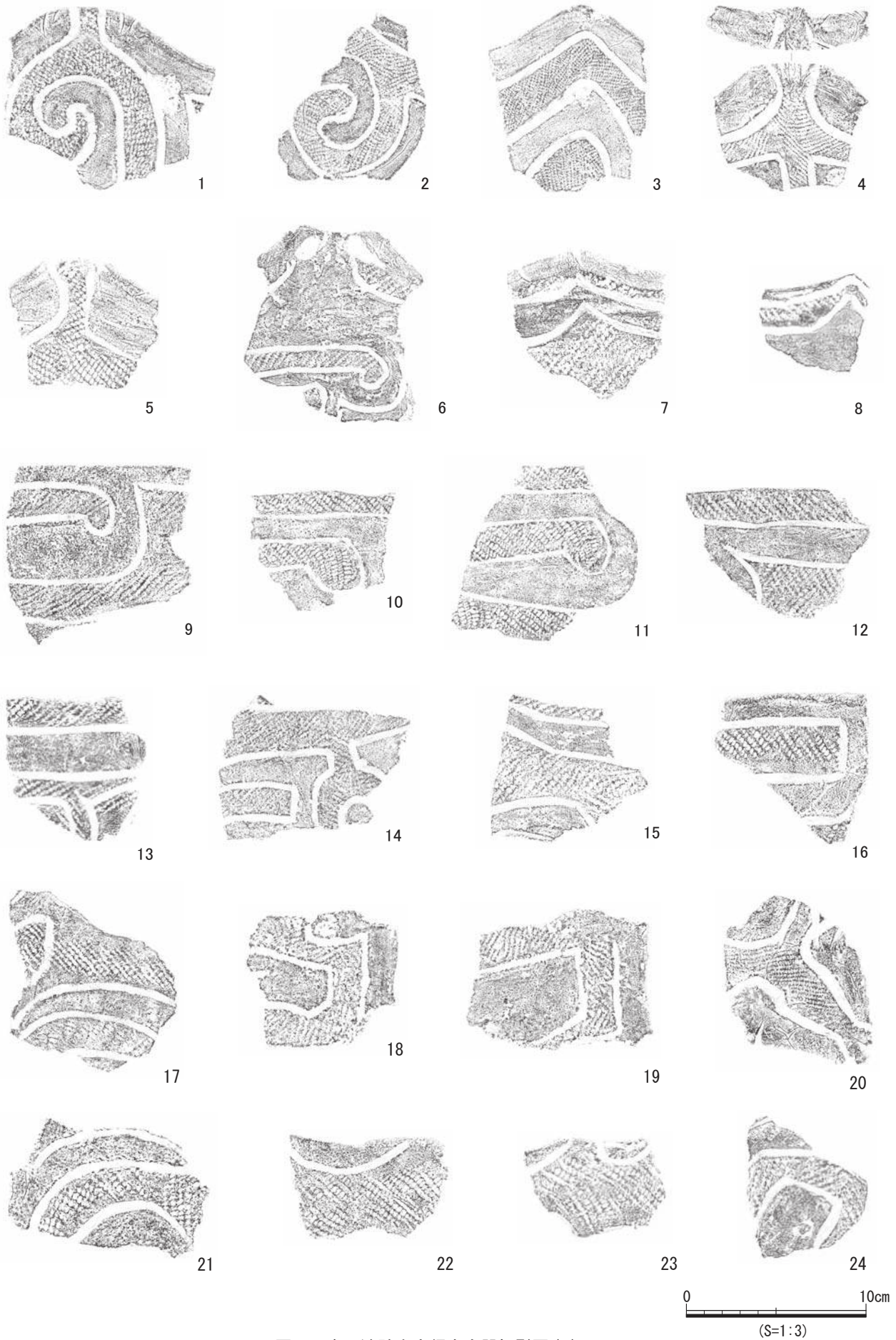


図2 白王遺跡出土縄文土器拓影図(1)

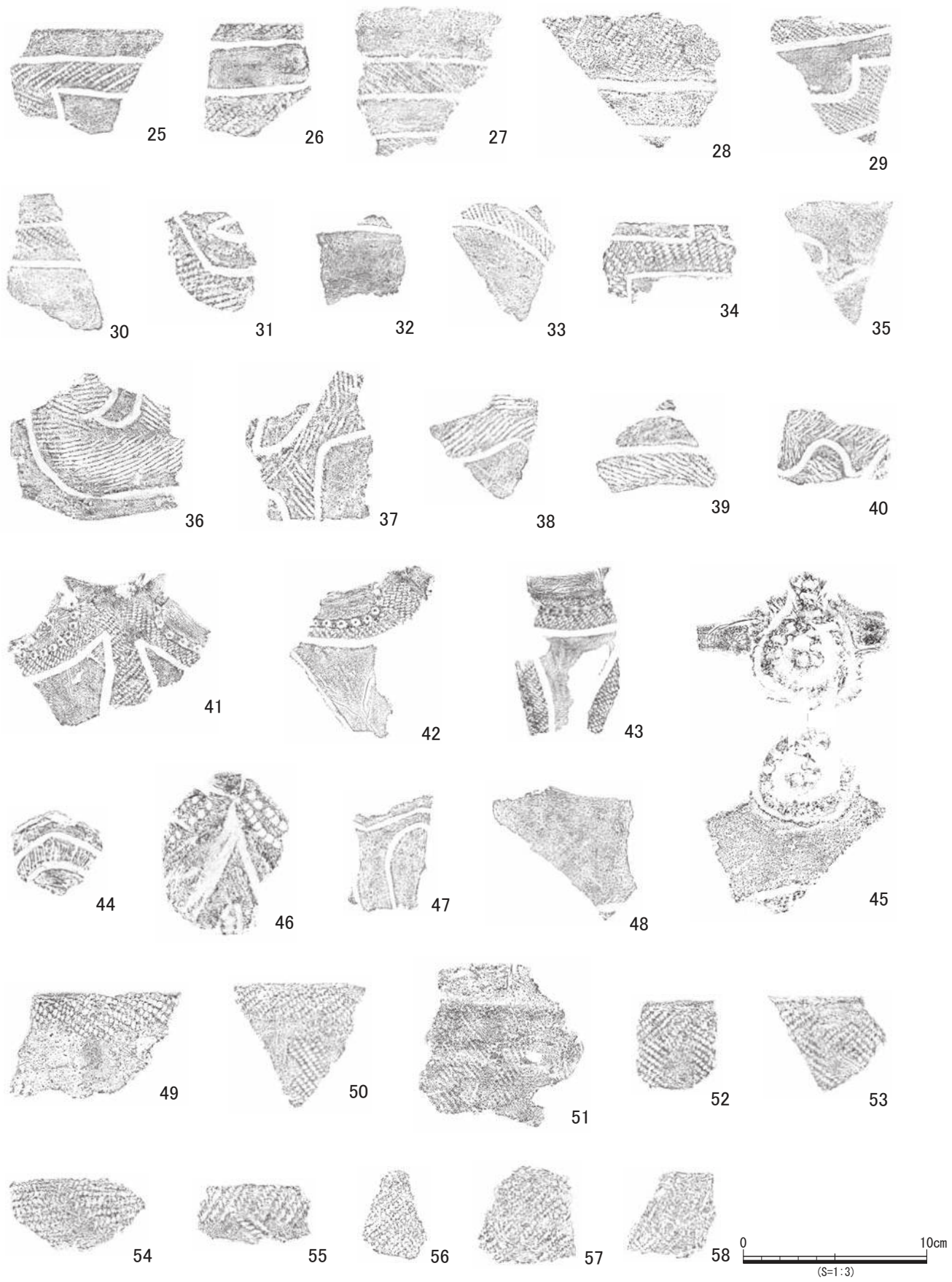


图3 白王遺跡出土縄文土器拓影図(2)

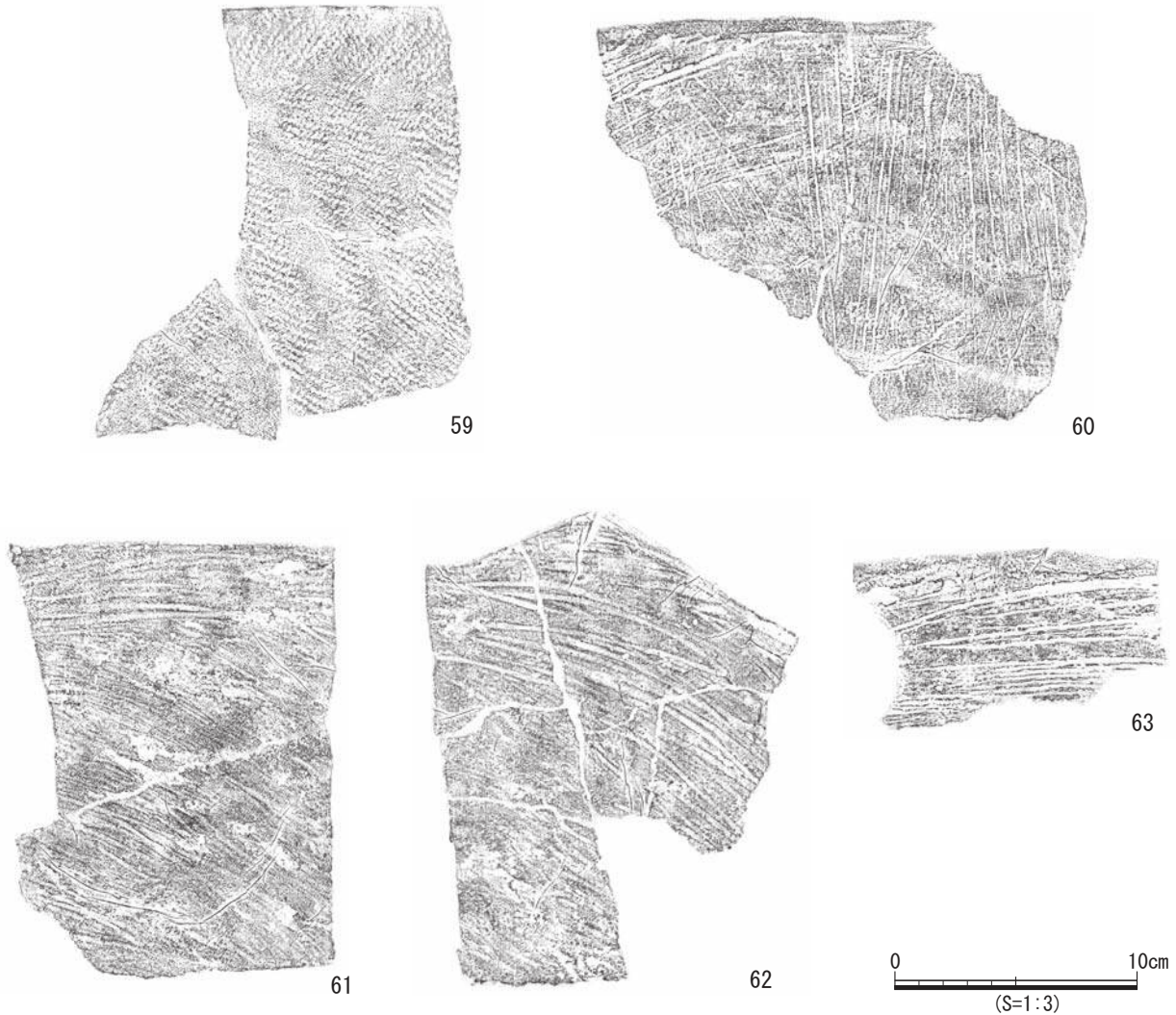


図4 白王遺跡出土縄文土器拓影図(3)

ば、「縄文時代早期～前期」と「縄文時代後期」である。ただし、これまで公表された資料からより厳密に主体となる時期を表現するならば、縄文時代早期後葉～前期後葉と同中期末～後期初頭とすべきと考える。

ここで考えておきたいのは、今回公表した拓影図のほとんどが縄文時代後期初頭のほぼ限定された時期の土器、という点である。すなわち、これらがどのような意図で選択されて現在ここに拓影図として残されているのか、という経緯である。

これらの縄文土器は、企画展『近江の縄文時代』に際して集められたものとされているが、展示図録にはそのいずれもが掲載されていない。これは、白王遺跡出土縄文土器中に、前述のように琵琶湖干拓資料館展示のより良好な残存状態にある縄文時代後期初頭の完形土器が多数あるため、これら破片資料は限りある紙面に掲載されなかった結果であると推定される。それら完形土器のほかにも白王遺跡の縄文土器が実際に展示されたかどうかは定かではないが、展示スペースに余白が出ることを恐れて、展示品集荷

に際しては多めに集められたものと考えられる。縄文時代早期～前期の土器についても、展示図録には6点しか掲載されていない(図5)。

これらの拓影図が残された選択の意図は誰によるものなのか。おそらくは、大きくは採拓者の意図によるものと推定されるのだが、集荷の際の旧蔵者や展示企画者の意図がそこに反映されている可能性はないのか。3人のいずれもが故人のため、今となってはその経緯は定かではない。

なぜことさらにこのようなことをここで取り上げているのかといえば、前述のように、今回報告した縄文土器のほとんどが現在所在が確認できていないからである。口縁部を含む比較的良好な資料が多数含まれていると推定されるこれら縄文土器の拓影図の存在からすれば、我々の知らない白王遺跡出土の縄文土器がほかにも多数存在する可能性が否定できない。特に、拓影図のみが残されている縄文土器のほとんどが縄文時代後期初頭の中津式に属するものなのである。

滋賀県域では、中津式土器が良好な状態で出土した遺跡

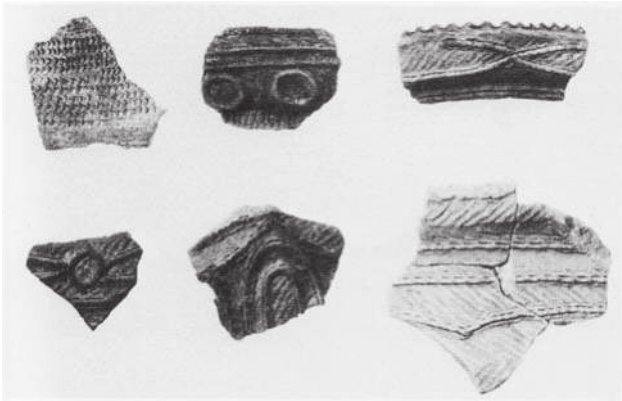


図5 『近江の縄文時代』掲載白王遺跡出土遺物

が極めて少ない（小島2008B）。これは、当該期には遺跡数が縄文時代中期末の北白川C式期に比べて減少したという事象を表していると考えられる。その意味では、発掘調査資料ではない採集資料とはいえ、白王遺跡は滋賀県域で最も良好な中津式土器が出土した遺跡といえる。滋賀県域の縄文時代後期初頭の土器について型式学的検討を行う時、白王遺跡の資料が増加すれば検討する要素が増加することにもつながる。

筆者らが整理・報告した資料群中にも、拓影図のみが残されて現物が見当たらない縄文土器が15点存在したし（鈴木・小島2002）、最初に佐藤氏らが公表した拓影図15点のうち14点も所在を確認していない（佐藤・酒井1977）。こういった経緯からすれば、縄文土器を主体とする採集された資料群が、どれだけの内容を持っていたのか、これまでに公表されている資料よりもどれだけ多くの情報を持っていたのか、非常に気になるところである。

6. おわりに

現在の白王遺跡が位置するあたりには、一面に水田が広がっている。ほ場整備事業もすでに完了しているため、遺跡所在地や遺物の散布はもはや確認することができない。食糧難により戦時中から始まった琵琶湖内湖の干拓事業により、白王遺跡をはじめとする多数の湖底遺跡が発見されたが、一部の遺跡を除き、その多くでは正式な発掘調査が実施されなかった。先人によりかろうじて採集された遺物により、それらの存在が我々に伝えられているのみである。

しかし、特に縄文時代については、この干拓事業により多くの遺跡が発見されることとなったという事実は否定できない。近年の琵琶湖内湖における縄文時代遺跡の発掘調査は、これらの発見からつながるものとして認識される。琵琶湖東岸の米原市入江内湖や彦根市松原内湖、近江八幡市・安土町・東近江市旧能登川町の大中の湖・小中の湖などの旧内湖底では、1990年代より発掘調査が多数実施されている。これらの調査では、低湿地であることから、縄文土器や石器だけではなく木製品をはじめとする多種多様な

遺物が良好な状態で出土し、多くの成果を上げている。それらの情報を活用して、我々は当時の人々の営みを復元しようとしている。我々の研究が先人たちの苦労の上に成り立っていることを、今一度認識しておきたい。

（こじま たかのぶ）

引用・参考文献

- 内田和典2006「滋賀県白王遺跡出土の縄文後期初頭土器について」『古代学研究』第174号 古代学研究会
- 小島孝修2008A「高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器—滋賀県域における縄文時代中期末の理解に向けて—」『紀要』第21号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小島孝修2008B「滋賀県の概要」『第9回研究集会「関西の縄文中期末土器—北白川C式とその周辺—」 関西縄文文化研究会
- 小林達男編1988『縄文土器大観第4巻 後期・晩期・続縄文』小学館
- 佐藤宗男・酒井和子1977「7. 大中の湖西遺跡出土の縄文式土器」『滋賀文化財だより』No.3 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 佐藤宗男1985「138. 近江八幡市白王町大中の湖西遺跡出土の異形石器」『滋賀文化財だより』No.106 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県教育委員会2003『平成13年度 滋賀県遺跡地図（改訂版）』滋賀県立近江風土記の丘資料館1984『近江の縄文時代』（展示図録）鈴木康二・小島孝修2002「2-12. 白王遺跡」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

紀 要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel.077-548-9780(代)
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)同朋舎